

インフラツーリズムのさらなる拡大に向けて 提言

1. これまでの取り組み

- 平成25年「観光立国実現に向けたアクション・プログラム」において、インフラを観光資源として活用する「インフラツーリズムの推進」が概念として示された。
- 平成28年、インフラツーリズムを紹介するポータルサイトを立ち上げ、広くインフラツーリズムの魅力を発信している。

取り組みから5年が経過

2-1. インフラツーリズムの現状

- ポータルサイトに取り上げた施設は平成29年度は約370施設で年間約50万人の来訪者がある。
- 民間事業者が催行するツアーも年々増加している。
- 多くの来訪者を集める施設も増えている一方、インフラの魅力を十分に活かしていない施設も未だ多くある。

2-2. インフラツーリズムの課題

- インフラツーリズム拡大にあたっての課題
 - ①施設の見せ方
 - ②広報周知
 - ③対応要員の確保
 - ④受入環境の整備
 - ⑤安全性の確保
 - ⑥持続性の確保
 - ⑦地域との連携

3. インフラツーリズムの理念

- インフラツーリズムは、インフラへの理解を深めていただくため、普段訪れることのできないインフラの内部や、日々変化する工事中の風景などの非日常を体験するツアーを展開することにより、地域に人を呼び込み、地域活性化に寄与することを目指すもの。

4. インフラツーリズムを拡大させるための方向性

- 土木広報としてのインフラの見学会に付加価値をつけて、人を呼べる観光資源としてインフラを磨き上げ、地域と連携して周辺観光資源への立ち寄りや地域への宿泊を促し、地域活性化を進めていく必要がある。
- インフラツーリズムの拡大にむけて課題を解決していくためのポイントを「勘所」として、『人を呼び込むための工夫』、『より多くの人を受け入れるための工夫』、『持続的に展開するための工夫』に整理し、各インフラの現状や目標とするところに合わせて実施していく必要がある。

『人を呼び込むための工夫』

- ・施設の魅力を高める見せ方
どこを、どのように見せれば、迫力があるか／驚きがあるか／楽しいか 等を考え工夫する。
- ・インフラが生みだした空間の活用
インフラが生み出した空間や景観の「場」としての活用方策を検討する。
- ・施設管理者による情報発信
イベント情報は、分かりやすく、早めに周知していく。
- ・多様な主体との連携による情報発信
情報発信は“情報を伝える”から“魅力や価値が伝わる”へ転換し工夫する。

『より多くの人を受け入れるための工夫』

- ・民間事業者などとの連携
観光需要が高い土日祝日での開催や受け入れ枠拡大に向けて、施設管理者主体の対応が難しい場合は、民間事業者、NPO、ボランティア等と連携する。
- ・現場における受け入れの工夫
来訪者数を増やしていくなかで、現状の施設の受入環境で対応するために工夫する。
- ・周辺施設との連携
インフラ側でトイレや駐車場等を十分に整えることが難しい場合は、周辺施設と連携する。
- ・事故を回避する対策
観光資源としての活用が想定されていないインフラの内部等を開放する場合は、十分に安全性を確保する。

『持続的に展開するための工夫』

- ・地域の協議会等での運営
インフラの観光資源としての活用について、地域の方々と連携し理解を得ながら実施していくため、地元関係機関等からなる協議会等により運営する。
- ・DMOや旅行会社等との連携
DMOや旅行会社等のノウハウを活かし、幅広くインフラツーリズムを展開していく。
- ・周辺観光資源との組み合わせ
インフラツーリズムを地域活性化に繋げるため、観光客が地域で滞留するように周辺観光資源と連携する。
- ・多言語対応と観光資源としての魅力発信
訪日外国人旅行者にもインフラツーリズムを楽しんでいただくため、日本のインフラの機能性や土木技術の高さ等が伝わる工夫をする。

- インフラツーリズムを拡大していくためのポイントを、様々な事業で展開するために手引きを作成し、各インフラ施設では手引きを活用して、インフラの魅力を高め、周辺観光資源との連携を図り、地域全体で来訪者を迎え入れ、地域活性化に寄与するインフラツーリズムに育てていく必要がある。

5. インフラツーリズムのさらなる拡大に向けての取り組み

- インフラツーリズムの拡大に向けまとめた手引きを活用して全体のレベルアップを図るとともに、施設の見せ方や体制の確保、地域との連携などを具体的に現地で実行するための社会実験として、より一層魅力的なツアーの造成をモデル地区で実施し、国内外に向けた広報の展開や訪日外国人旅行客のニーズを把握したインバウンド対応を実施していく必要がある。
- プロジェクトを踏まえ得られた知見を活用しながら、インフラツーリズムのさらなる拡大に向けて中長期的な取り組みを展開していく必要がある。

5.1 2020年に向けての取り組み

インフラツーリズムの拡大に向けての短期的な取り組みとして、現在の年間来訪者数50万人を2020年に年間来訪者数100万人とすることを目標に掲げる『インフラツーリズム魅力倍増プロジェクト』を実施する。人数の目標だけでなく、ツーリズムとしての質の向上を図るため、指標を設定する必要がある。

目標

- 年間来訪者の倍増
質の指標の向上
- ・2017年 50万人 ⇒ 2020年 100万人
- ・モデル地区での旅行消費額・満足度・リピーター率の向上
- ・一般市民の認知度・来訪度の向上

(1) プロジェクト-1 モデル地区での社会実験の実施

- 作成した「手引き」を活用し、選定したモデル地区で社会実験として、インフラの魅力高め、周辺観光資源との連携したツアーを造成し、ファムツアーとして検証を行い、インフラツーリズム拡大に関する具体的な知見を得る必要がある。

(2) プロジェクト-2 国内外に向け魅力ある広報の展開

- 国内外の観光需要の開拓や現地への誘客のため、インフラツーリズムポータルサイトの充実・多言語化やインフラツーリズムPR動画の作成等を実施する必要がある。また、インフラツーリズムの認知度向上のため、情報誌での魅力の発信や、インフラツーリズムに関するシンポジウムを開催するなど、情報発信を実施していく必要がある。

(3) プロジェクト-3 訪日外国人旅行客のニーズを把握したインバウンド対応

- 増加する訪日外国人旅行客の旅行ニーズを把握し、ニーズを踏まえた施設の見せ方や魅力発信等を実施し、インバウンド対応を展開していく必要がある。



5.2 将来的な取り組み

(1) インフラツーリズムのさらなる拡大

- モデル地区で得られた知見を様々な事業に展開し、インフラツーリズムの拡大を図ることが必要である。
- 来訪者数の増加やリピーターの確保に向けた満足度の向上のため、プレミアム感のある“今だけ・こだけ・あなただけ”という施設の見せ方を工夫して行うべきである。
- ガイドの方法や内容の充実を図るべきである。特に、ガイドの育成方法は、他分野の先進事例も踏まえながら検討することが望まれる。
- 国内外にインフラツーリズムの魅力を発信していく必要がある。情報発信は、インフラツーリズムを周知する段階、現地へ案内する段階、リピーターを確保する段階などに分けて発信することが望まれる。
- 工事中、供用中等の各ライフステージ段階でインフラツーリズムを進めるべきである。

(2) 民間事業者の参入によるさらなる展開

- 土日の公開や受け入れ枠の拡大など、施設管理者だけでは対応が困難である課題に対し、地域と連携する枠組みや民間事業者の参入の仕組みを構築し対応していくことが望まれる。

(3) 地域とのさらなる連携強化

- 地域の観光資源としてインフラを活用するためには、インフラ自体の魅力を高めるとともに、インフラがその土地にある意義を含め関連する地域の歴史や地形など周辺観光資源と連携すべきである。
- 地域と連携して来訪者を地域に滞在させる仕組みをつくり、地域への経済波及効果を増大させていくことが望まれる。

「インフラツーリズム有識者懇談会」委員名簿

- 阿部 貴弘 日本大学理工学部 教授
- 河野 まゆ子 株式会社JTB総合研究所 主席研究員
- 篠原 靖 跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部 准教授
- ◎清水 哲夫 首都大学東京大学院 都市環境科学研究科 教授

(敬称略・五十音順)

◎ : 座長

「インフラツーリズム有識者懇談会」開催実績

第1回: 平成30年11月9日

- ・インフラツーリズムのこれまでの取組と課題
- ・インフラツーリズムの今後の方向性

第2回: 平成30年12月25日

- ・インフラツーリズムの拡大に向けて

第3回: 平成31年2月26日

- ・拡大に向けたまとめと来年度の取組について